

■随想

ラオスで見た 昔の南信州のおもかげ

小林天心（高15回）

「信州」というと、たいていの人は松本とか長野を思い浮かべる。北アルプスや千曲川、あるいは木曾・馬籠や藤村かもしれない。

一般の人にとっての観光信州は、どちらかといえば諏訪以北、下つてもせいぜい駒ヶ岳あたりまで。かの南アルプスは、観光面で山梨や静岡に利用されており、飯田や天竜川流域が思い浮かべられる事はまれである。実際に観光客の入り込み数も、南信州は長野県全体の5%くらいしかないらしい。

ところが最近、観光の分野で南信州が話題となつていく。それどころか、業界では全国的な注目の的といつてもいいくらいなのである。

「観光」の新しい波

「観光」といえば、03年に政府が「観光立国」を言い始め、



●こばやし・てんしん
30年間、海外旅行のツアーづくりを手がけ、98年からニュージーランド観光局長、05年から（株）観光進化研究所代表。現在、亜細亜大学教授、北海道大学大学院講師。近著に『ツーリズムの新しい諸相』がある。

07年に「観光立国推進基本法」が成立、09年にはとうとう観光庁まで登場した。日本の立国政策は長い間ものづくり、工業、貿易といった方面に力が入られ、観光などという分野はほとんど重要視されていなかったが、ここへきてようやく諸外国にならない、政府が本格的な観光の旗振りを始めた。

「観光＝ツーリズム」と一口に言っても、その観点はいろいろである。旅行する観光客としての見方、それを受け入れる地域からの見方、そして両者をつなぐ旅行業や運輸機関からの見方など、それらは端的に、文化、地域振興、そして経済活動という三つの視点に置き換えることができる。

我々は戦後六十年にわたって、「経済成長」を合言葉に効率性を求め、それへの最短距離を突っ走ってきた。その面では大成功である。しかし、その間、どちらかと



幼い子どもが兄弟の面倒をよくみる

いえば自然、文化、ゆとり、美しさといったような事柄はなおざりにして、道路と車とダムだらけの国をつくってきた。

たしかに便利で豊かな暮らしにはなったものの、一方で日平均百人もの自

アジア唯一の内陸国である。インドシナ中央部に位置し、美しい歴史の町ルアンパバンは世界遺産になっている。

東はベトナム、西はミャンマーとタイ、南はカンボジア、北は中国の雲南省に囲まれた国。広さは日本の本州程度で、人口およそ六百万人の、アジア最貧国のひとつでもある。

日本は四方を海に囲まれているが、こちらは全部が陸続き。人口においても経済規模においても、さらに後で述べる農業のあり方を見ても、日本とはまったく正反対の国といっている。

インドシナに住む人々の祖先は、北方のアルタイ山脈やチベット方面から南下してきた人たちであり、長い間中華帝国を辺境から支えてきた。

ラオスのあたりは17世紀以降、タイ王国の支配下にあったが、19世紀末からはベトナムやカンボジアと共にフランスの植民地にされた。第二次世界大戦後に独立を目指したものの、やがてベトナム戦争に巻き込まれ、ここにアメリカ軍が後方基地を置いたため、ラオス北東部は戦場となつてしまい（北ベトナム軍のホーチミンルート）、アメリカ空軍はここにすさまじい量の爆弾を投下した。

「ラオスはアメリカから、国民一人当たりアジア最大の『カネと爆弾』を落とされた」とされるゆえんである。

ラオス——メコン河の宝石

殺者を出す国にもなった。だからこころあたりで一息入れて、おカネよりも気分的なゆとりとか、しあわせとかに視野を広げてみてはどうか、という気運が出てきた。グリーンとかエコロジーといった風潮がこれに重なっている。そこに登場してきたのが、観光の分野では従来の物見遊山とは一味違う、「南信州型」なのである。

一方、「メコン河の宝石」と呼ばれるラオスは、東南



ラオスの北部、ルアンナムタ付近の山間にある小さな村

したがって、ラオスが戦禍からようやく平和を取り戻したのは1980年代、それまでは「よその国から踏んだり蹴ったり」の三世紀だった」と、人々はいう。

焼き畑農業の国ラオスの変容

最近の三十年間でラオスの人口は倍増した。しかし、現在も人口の八〇%が農業に従事し、その大半は深い山間地域で焼き畑農業を営んでいる。焼き畑農業というのはこの頃すこぶる評判が良くない。急速に森を消滅させているからだ。

そもそもこの農業のやり方は、きわめて循環型の自然合理的なものだった。十分な広さの中で一定の区画を焼き払い、陸稲の種を播く。数年そこを利用したら村ごと別の場所に移

動する。こうした動きを数回重ねてゆくうちに、最初に使った場所は元の森に戻っている。だから山全体が丸裸になることなどありえなかった。

しかし、人口圧が高まったり、何らかの理由で彼らの移動面積が狭められたりすると、逆に焼き畑面積は広く、その循環サイクルも早くせざるをえない。森は消え、同時に収穫高は低下する。文字どおり、自然の恵みの元も子も失ってしまうのである。

もともと上記のようなラオスの農業は「半遊牧型」であり、山中の鳥獣・野草などの狩猟・採集との組み合わせにより成立していた。家々も竹と木と椰子の葉などを使って、すぐに出来る。自然と調和した、自給自足の素朴な世界だった。

しかし、最近の急激な人口増、資本主義化の波、さらには行政や教育の効率化を目指す政府の農村集約政策、チークやゴムの植林政策などが、もはや昔ながらの牧歌的な焼き畑農業を許さなくなりつつある。

また、貨幣経済が急速に浸透し始め、上記のような農村でバイクやケータイ電話が使われた。地域社会のありようそのものが、根本的な変化に見舞われようとしているのである。

それでもこの地域のきわめて素朴な人々、昔ながらの

暮らしぶり、文化や自然が、新しい時代の観光素材として国際的な人気を集め始めた。

「ここだけ、あなただけ」という旅の形

日本の南信州とラオスのあり様は全く違っている。しかし両者が目指す新しい観光の形は、ともに「エコツーリズム」であり「グリーンツーリズム」である。

前者は自然や文化の、後者は農村滞在の「体験型観光」



メコン川流域の村で、子どもたちのバザー

と表現されていて、実際重なり合う部分が多い。一般民家や農家に泊り込むこともある。時には足手まといになったりもするが、農作業の手伝いなどもする。有名観光地やリゾートめぐり

とは無縁の観光のあり方が、少なからず人気を得る時代になってきた。

それは、どこでも誰でも、というのではなく、「ここだけ、あなただけ」という独特な自然や文化に接する旅の形であり、ゆっくり、少人数で、静かに、旅行を楽しむ。従来の団体周遊型や「宿泊つき大宴会」パターンとはかなり趣を異にするのである。

飯田は前市長の田中秀典さんの時に「南信州観光公社」を立ち上げ、先に記したような新しい観光の形を積極的に推進した。これが地域振興の面から、環境省や農水省にも高め高い評価を受け、全国各地の注目を集めているという次第。

私は四十五年間、国際観光の分野で仕事をし、現在は日本アセアンセンターの関係や大学で、いろいろな地域や国の観光開発について多少のお手伝いをしている。従来型の「安く、大量に」というパターンから抜けて、「ゆっくりいい体験を」という、南信州型エコツーリズムがラオスにも適用できるはずである。

同じメコン河流域のタイ、カンボジア、ベトナムなどに比べるとラオスは後発だが、深い山国の暮らしは半世紀前の南信州にちょっと似ていなくもない。

人と自然ともに、その素材さゆえの宝ではないか。